

Sun Java™ System Calendar Server リリースノート

バージョン 6 2005Q1

Part No. 819-1472

注 このバージョンの Calendar Server には Sun Solve にパッチが用意されています。詳細については、「[重要なパッチ情報](#)」を参照してください。

このリリースノートには、Sun Java System Calendar Server 6 2005Q1 のリリース時点で利用可能な次のような重要な情報が記載されています。

- [2 ページの「Calendar Server バージョン 6 2005Q1 について」](#)
- [2 ページの「Calendar Server 6 2005Q1 の新機能」](#)
- [9 ページの「ハードウェアおよびソフトウェア要件と推奨事項」](#)
- [11 ページの「インストール前の注意事項」](#)
- [22 ページの「既知の問題と制限事項」](#)
- [25 ページの「再配布可能なファイル」](#)
- [31 ページの「Communications Express」](#)
- [39 ページの「Delgated Administrator Utility」](#)
- [44 ページの「Connector for Microsoft Outlook」](#)
- [45 ページの「問題の報告とフィードバックの方法」](#)
- [46 ページの「コメントの送付先」](#)
- [46 ページの「Sun が提供しているその他のリソース」](#)

このリリースノートを読んでから、Calendar Server をインストールして設定してください。

Calendar Server バージョン 6 2005Q1 について

Calendar Server は、企業やサービスプロバイダのカレンダーおよびスケジュールの管理を集中化するためのスケーラブルな Web ベースのソリューションです。Calendar Server は、予定と仕事の両方に対応するユーザーカレンダー、および会議室や備品などのリソース用のカレンダーをサポートしています。新機能の一覧については、次の節「[Calendar Server 6 2005Q1 の新機能](#)」を参照してください。

Calendar Server は、Calendar Express と Communications Express の 2 つのグラフィカルユーザーインターフェイスを提供します。また、Calendar Server を使用すると、顧客は Web カレンダーアクセスプロトコル (WCAP) を使用してカレンダーデータに直接アクセスする際に、text/calendar 形式または text/xml 形式を柔軟に選択できます。

Calendar Server 6 2005Q1 の新機能

Calendar Server 6 2005Q1 には、次の変更と新しい機能が含まれています。

- [2 ページの「自動バックアップ」](#)
- [5 ページの「読み取り専用のデータベース」](#)
- [5 ページの「アラームデータベースの個別の再構築に対するサポート」](#)
- [6 ページの「csdb rebuild によるデータベースの自動検証」](#)
- [6 ページの「User Management Utility の名前変更」](#)
- [6 ページの「インストールの変更 - Directory Server Preparation Script \(comm_dssetup.pl\)」](#)
- [7 ページの「Web カレンダーアクセスプロトコル \(WCAP\) の変更」](#)
- [9 ページの「古くなった配備ガイド」](#)

自動バックアップ

この節の内容は次のとおりです。

- [3 ページの「旧バージョンでの csstored.pl の概要」](#)
- [3 ページの「新しい csstored サービスの概要」](#)
- [4 ページの「データベース障害からの回復方法」](#)
- [4 ページの「csconfigurator.sh での自動バックアップの設定」](#)

旧バージョンでの csstored.pl の概要

以前のバージョンの Calendar Server には、ユーティリティの 1 つとして csstored.pl が製品にバンドルされており、このユーティリティを起動すると、カレンダーデータベースとログファイルに対するオンライン (ホット) アーカイブ操作 (つまり、データベースおよびログファイルのスナップショットの作成) を実行することができました。このユーティリティの機能は次のとおりです。

- データベースファイルと現在のログファイルを、バックアップアーカイブディレクトリと「ホット」バックアップディレクトリにコピーする。
- Berkeley データベースの db_archive ユーティリティから返されたログファイルを、バックアップアーカイブディレクトリと「ホット」バックアップディレクトリにコピーする。
- Berkeley データベースの db_archive ユーティリティから返されたログファイルを、最新のファイル以外すべて、現在のデータベースディレクトリから削除する。これによって、現在のデータベースに適用済みのすべてのログファイルが識別できます。
- Berkeley データベースの db_verify を、「ホット」バックアップディレクトリ内のデータベースファイル上で実行する。

新しい csstored サービスの概要

Calendar Server 6 2005Q1 のリリースに伴い、この Perl スクリプトは、start-cal を実行すると自動的に起動されるサービス (csstored) に変更されました。ただし、バックアップは、設定して有効化しないと実行されません。Calendar Server の自動バックアップのタイミングは、次のように設定できます。

- Calendar Server 設定プログラム csconfigurator.sh の実行時。
- インストール後の設定の後の任意の時点。これは、『Sun Java System Calendar Server 管理ガイド』の「自動バックアップ (csstored) の設定」で説明されている手順に従って実行します。

新しい csstored サービスは次の機能を実行します。

- 設定された間隔で、データベースファイルのスナップショットを作成します。データベースファイルと現在のログファイルを、設定方法に従って、アーカイブディレクトリまたは「ホット」バックアップディレクトリ、あるいはその両方にコピーします。
- スナップショットに対して db_verify を実行します。
- 検証手順が失敗したら (データベースが破損している場合)、管理者に通知します。管理者は現在のデータベースを読み取り専用モードにすることができます。データベースが読み取り専用モードになっている間、変更や削除のトランザクションは受け入れられません。カレンダーの管理者には破損が通知されます。次のスナップショットの前にデータベースの破損が検出された場合、管理者はこの手順を手動で実行できます。
- db_verify によってスナップショットが検証される場合、インターバル期間に現在のデータベース処理を続行します。インターバルの実時間に、適用済みのトランザクションログファイルを、現在のデータベースディレクトリからアーカイブディレクトリまたはホットバックアップディレクトリ (あるいはその両方) に移動します。

- データベースのホットバックアップコピーに、ログファイルを非同期で適用します。これによって、ホットバックアップコピーは、常に最新のトランザクションログが適用された状態と同じく最新になります。

データベース障害からの回復方法

現在のデータベースに障害が発生し、バックアップと置き換える必要がある場合、最小限の処理でホットバックアップコピーを使用できるので、停止時間を最小限に抑えることができます。ホットバックアップコピーを準備するには、適用されていないトランザクションをホットバックアップディレクトリにコピーし、それに対して `db_recover` を実行するだけです。このユーティリティが最終の未適用のトランザクションログを適用して、破損状態をチェックします。次に、`db_verify` を実行して、データベースの状態をチェックします。データベースが正常であれば、ホットバックアップコピーを新しい本稼動用コピーとして使用することができます。

新しい自動バックアップ機能と、この機能に必要なとされる設定および管理方法については、『Sun Java System Calendar Server 管理ガイド』の自動バックアップに関する章を参照してください。

自動バックアップのいずれかを復元する方法については、『Sun Java System Calendar Server 管理ガイド』の「トラブルシューティング」の章を参照してください。

自動バックアップが有効になるまで、未設定であることを示すエラーメッセージがカレンダー管理者に 24 時間ごとに送信されます。Calendar Sever に対しては、ホットバックアップを実行することを強くお勧めします。

ヒント 自動バックアップを無効にしている場合は、循環ロギングを有効 (`caldb.berkeley.circularlogging="yes"`) にして、空きディスク容量が古いトランザクションでいっぱいにならないようにします。循環ロギングは、自動バックアップの使用時には無効 (`caldb.berkeley.circularlogging="no"`) にしておく必要があります。

cscconfigurator.sh での自動バックアップの設定

設定プログラムにより、自動バックアップを設定するかどうかを尋ねられます。ここで設定プログラムによって自動バックアップ(ホットバックアップ)を設定するか、あるいは、『Sun Java System Calendar Server 6 2005Q1 管理ガイド』に示された手順に従って、後で自動バックアップを設定することもできます。

読み取り専用のデータベース

Calendar Server は、カレンダーデータベース (ユーザーおよびリソース情報用の LDAP 以外) に Berkeley データベースを使用します。現在の Berkeley データベースが破損し、データを回復する間もユーザーアクセスを提供し続ける必要がある場合、Calendar Server 6 2005Q1 では、データベースを読み取り専用モードにすることができます。このモードでは、サーバーはデータベースに対する更新または削除トランザクションを受け入れません。読み取りトランザクションのみがサポートされます。

自動バックアップが設定されていると、サービスは、データベースの新しいスナップショットのそれぞれに対して `db_verify` を実行します。障害が検出されたら、管理者に警告メッセージが自動的に送信されます。これで管理者はデータベースを読み取り専用モードにすることができます。

ただし、日中に、スナップショットとスナップショットの間で後から障害が検出されることもあります。このような場合は、回復を試みている間、現在のデータベースを読み取り専用モードにしておくことができます。Berkeley データベースを個別に選択して読み取り専用モードにすることはできません。

詳細については、『Sun Java System Calendar Server 6 2005Q1 管理ガイド』の「トラブルシューティング」の章を参照してください。

Berkeley データベースを読み取り専用モードにするには

1. `ics.conf` ファイルを次のように編集します。

```
caldb.berkeleydb.readonly="yes"
```

2. Calendar Server を再起動します。

```
./start-cal
```

アラームデータベースの個別の再構築に対するサポート

以前のバージョンの Calendar Server では、`csdb rebuild` を実行するとすべての Calendar Server データベースが再構築されました。Calendar Server 6 2005Q1 では、アラームデータベースのみを再構築するように選択できます。これは、アラームデータベースが最も破損の可能性が高く、最もすばやく再構築できるということが分析によってわかったからです。どのデータベースが破損したのかがわからない場合、まずアラームデータベースに対してのみ再構築を実行して、問題が解決するかどうかを確認することができます。問題が解決しなければ、全体の再構築ユーティリティ (`csdb`) を実行することができます。

csdb rebuild によるデータベースの自動検証

以前のバージョンの Calendar Server では、csdb を使用してデータベースを再構築したら、データベースの再構築を検証するために db_verify を手動で実行する必要がありました。今回のバージョンでは、csdb ユーティリティの rebuild コマンドによって、再構築されたデータベース上で db_verify が自動的に実行されます。

User Management Utility の名前変更

ユーザー、リソース、およびドメインのプロビジョニングと管理のために使用されるコマンド行専用ユーティリティである User Management Utility が、Delegated Administrator Utility という名前に変更されました。ただし、これが Calendar Server をサポートするスキーマ 2 のための唯一のプロビジョニングツールであることに変わりはありません。

2005Q1 でリリースされた Delegated Administrator のグラフィカルユーザーインターフェースは、Calendar Server をサポートしていません。

注 これは、スキーマ 1 のプロビジョニングのために以前のバージョンの Messaging Server によって使用されていた Delegated Administrator とは違うものです。いずれにしても、それは Calendar Server をサポートしていませんでした。

まだスキーマ 1 を使用している場合は、『Sun Java System Calendar Server 6 2005Q1 管理ガイド』で説明している Calendar Server のコマンド行ユーティリティを使用してください。

インストールの変更 - Directory Server Preparation Script (comm_dssetup.pl)

Directory Server Preparation Script (comm_dssetup.pl) は、Calendar Server および Messaging Server 製品にはバンドルされなくなりました。これは、Java Enterprise System インストーラ内で単独でインストールできるコンポーネントになりました。コンポーネント選択パネルで、Directory Server Preparation Script を単独で選択することができます。または、Directory Server を選択すると自動的に選択されます。

一般に、製品変更があると、以前のバージョンの Directory Server Preparation Script を実行していたとしても、新しいバージョンをインストールして実行する必要が生じます。以前のバージョンを持っていても、必要な更新が含まれていないので、再実行しないでください。

Web カレンダーアクセスプロトコル (WCAP) の変更

WCAP では次のような変更が行われました。

- [7 ページの「Freebusy リダイレクト URL」](#)
- [8 ページの「既存の WCAP コマンドの変更」](#)
- [8 ページの「新しいエラーメッセージ」](#)

Freebusy リダイレクト URL

この節の内容は次のとおりです。

- [7 ページの「Freebusy リダイレクト URL 機能とは」](#)
- [7 ページの「動作方法」](#)

Freebusy リダイレクト URL 機能とは

Microsoft Exchange から Calendar Server に移行する顧客向けに、WCAP に新しい機能が追加されました。この機能では、最初に Calendar Server データベース、次に Microsoft Exchange データベースの順で、両方のデータベースを検索することができます。これによって、顧客は移行中でもカレンダーサービスを維持できます。この機能を実現するために、WCAP では次の 2 つの変更が行われました。

- 次の `ics.conf` パラメータが追加されました。
`service.wcap.freebusy.redirecturl`
- 次のパラメータが `free_busy` コマンドに追加されました。

`noredirect`

このパラメータは整数で、0 と 1 の 2 つの値が入ります。デフォルトは 0 で、この場合、サーバーは `free_busy` リダイレクト URL が `ics.conf` ファイル内に存在すればこれを使用します。

この値を 1 に設定すると、`ics.conf` ファイル内にリダイレクト URL が存在しても、サーバーはリダイレクト URL 検索を行わず、使用しません。

動作方法

サーバーは、`free_busy` コマンドを受け取ると、Calendar Server のカレンダーデータベースをチェックします。サーバーがカレンダーを見つけられない場合、次の処理が実行されます。

1. サーバーは、`get_freebusy` コマンドによって `noredirect` パラメータが渡されたかどうかを確認します。
2. `noredirect` パラメータの値が 0 であるか、渡されていない場合、サーバーは、`ics.conf` ファイルのパラメータ `service.wcap.freebusy.redirecturl` 内の値を探します。
3. `service.wcap.freebusy.redirecturl` パラメータが存在しており、値に URL が入っていれば、要求したプログラムにその URL が返されます。Microsoft Exchange データベース内でのカレンダーの検索のためにその URL を使用するかどうかは、要求したプログラム側で決定します。

4. 次のどちらかに当てはまる場合、サーバーはエラーを返します。
 - `service.wcap.freebusy.redirecturl` パラメータが存在しないか、値が空白である場合。
 - `get_freebusy` コマンドによって、`noredirect` パラメータに値 1 が渡された場合。

既存の WCAP コマンドの変更

既存の WCAP コマンドでは、次のようなパラメータの変更が行われました。

- `notify` - 次のコマンドから `notify` パラメータが削除されました。
 - `deletecomponents_by_range`
 - `deleteevents_by_id`
 - `deleteevents_by_range`
- `smtp-notify` パラメータの代わりに `smtp` パラメータが追加されました。
- `noredirect-free_busy` コマンドに `noredirect` パラメータが追加されました。このパラメータは、要求されたカレンダーが見つからない場合はリダイレクト URL を返さないように、サーバーに指示します。
- `fetchorder` - このパラメータが、すべての `fetch*_by` コマンドに追加されました。これによって、予定や仕事が返される順序を選択できるようになります。昇順、降順、またはほぼ昇順である特殊な (レガシー) 順序の中から選択できます。
- `excludedtstart` - このパラメータが、`storeevents` および `storetodos` コマンドに追加されました。これによって、`rrules` によって生成された日付セットの範囲外の場合でも、`dtstart` の日付が一連の繰り返しに含まれるかどうかを指定します。

これらのパラメータの詳細については、『Sun Java System Calendar Server 6 2005Q1 Developer's Guide』を参照してください。

新しいエラーメッセージ

新しいエラーメッセージが 1 つ追加されました。エラー 81: `RECURRING_COMPONENT_NOT_FOUND` - `Recurring component not found.` これは、`fetch` コマンドによって `recurring=1` が渡された場合にのみ発生します。このコードは、一連の繰り返しが見つからない (マスターか例外のいずれか) 場合に返されます。

このエラーは、フェッチされるトランザクション最大数の制限か、日付範囲の制限によって、一連の繰り返しが切り捨てられると発生することがあります。

古くなった配備ガイド

『Sun Java System Calendar Server 6 2004Q2 Deployment Guide』および『Sun Java Communications Services 6 2004Q2 企業向け配備計画ガイド』は推奨されなくなりました。代わりに、『Sun Java System Communications Services 6 2005Q1 配備計画ガイド』を参照するようにしてください。

ハードウェアおよびソフトウェア要件と推奨事項

ここでは、Calendar Server のこのリリースに必要な、または推奨されるハードウェアとソフトウェアについて説明します。

- [9 ページの「ハードウェア要件と推奨事項」](#)
- [10 ページの「ソフトウェア要件と推奨事項」](#)
- [10 ページの「重要なパッチ情報」](#)

注

フロントエンドマシンおよびバックエンドマシンに機能を分割する Calendar Server インストールの場合、それぞれのエンドのハードウェアプラットフォームとオペレーティングシステムが同じである必要があります。

つまり、ビッグエンディアンとリトルエンディアンでは互換性がないため、フロントエンドマシンとバックエンドマシンから構成される Calendar Server 配備内では x86 プラットフォームマシンと Sparc プラットフォームマシンの両方を使用することはできません。

また、フロントエンドマシンとバックエンドマシンでの Solaris x86 オペレーティングシステムと Linux オペレーティングシステムの混在はテストされていないので、現在サポートされていません。

ハードウェア要件と推奨事項

- 標準インストールの場合、約 500M バイトのディスク容量。本稼働システムの場合、最低 1G バイト。
- 128M バイトの RAM。本稼働システムの場合、最適なパフォーマンスを得るには 256M バイト～1G バイトが必要。
- 高速アクセス用の RAID ストレージ (大規模なデータベースでは使用が推奨される)。

ソフトウェア要件と推奨事項

- [10 ページの「サポートされるソフトウェアプラットフォーム」](#)
- [10 ページの「クライアントコンピュータ用の推奨ブラウザ」](#)

サポートされるソフトウェアプラットフォーム

- Solaris™ 10 オペレーティングシステム (SPARC® Platform Edition, x86 Platform Edition)
- Solaris™ 9 (5.9) オペレーティングシステム (SPARC® Platform Edition, x86 Platform Edition)
- Solaris™ 8 (5.8) オペレーティングシステム (SPARC® Platform Edition)
- Red Hat Enterprise Linux AS 2.1 u2, AS 3.0

クライアントコンピュータ用の推奨ブラウザ

Sun Java System Communications Express 6 2005Q1 には、JavaScript 対応のブラウザが必要です。最適なパフォーマンスを得るには、次のブラウザが推奨されます。

表 1 Calendar Server 6 用に推奨されるブラウザのバージョン

ブラウザ	Windows 98	Windows XP	Windows 2000	Solaris	Red Hat Linux	Macintosh OS X
Netscape™ Communicator	7.2	7.2	7.2	7.2	7.2	7.2
Microsoft Internet Explorer	6.0 SP1 以降	6.0 SP2	6.0 SP1 以降	適用なし	適用なし	適用なし
Mozilla™	1.5+	1.5+	1.5+	1.4	1.5+	1.5+

重要なパッチ情報

Calendar Server 6 2005Q1 にはパッチが用意されています。Calendar Server を実行する前に、パッチを追加することをお勧めします。次の表 2 は、各プラットフォームに対応するパッチ番号を示したものです。

表 2 Calendar Server 6 2005Q1 のパッチ番号

プラットフォーム	パッチ番号
Solaris、SPARC	116577-17
x86	116578-17
Linux	116851-17

1. Sun Java System Calendar Server に必要なパッチの最新の一覧の詳細については、次のサイトにアクセスします。

<http://sunsolve.sun.com>

2. 「パッチ」または「パッチ・サポート・ポータル」を選択します。
3. Sun Java System Calendar Server のリンクに従って進みます。

オペレーティングシステムのパッチ要件が変更されたり、Java Enterprise System コンポーネントに対するパッチが入手可能になったら、SunSolve 上の更新が使用できるようになります。最初は推奨されるパッチクラスタの形で提供されます。

インストール前の注意事項

ここでは、Calendar Server 6 2005Q1 をインストールする前に理解しておく必要のある情報が記載されています。内容は次のとおりです。

- [12 ページの「フロントエンドおよびバックエンドマシンとオペレーティングシステム」](#)
- [12 ページの「Linux プラットフォームのサポート」](#)
- [13 ページの「OS パッチ」](#)
- [13 ページの「必要な権限」](#)
- [13 ページの「Java Enterprise System インストーラ」](#)
- [15 ページの「カレンダーデータベースのアップグレード」](#)
- [15 ページの「インストール後の設定手順」](#)
- [16 ページの「Calendar Server のデータとユーティリティの場所」](#)
- [17 ページの「Directory Server のパフォーマンス」](#)
- [19 ページの「スキーマ 1 を使用する Communications Express」](#)
- [19 ページの「定期的な予定用の新しい移行ユーティリティ」](#)
- [20 ページの「Calendar Server 6 のマニュアル」](#)

警告

Calendar Server は NFS (Network File System) のマウント済みパーティションをサポートしていません。NFS のマウント済みパーティションには、実行可能ファイル、データベース、設定ファイル、データファイル、一時ファイル、ログファイルなど、Calendar Server のどの部分もインストールまたは作成しないでください。

フロントエンドおよびバックエンドマシンとオペレーティングシステム

フロントエンドマシンおよびバックエンドマシンに機能を分割する Calendar Server インストールの場合、それぞれのエンドのハードウェアプラットフォームが同じである必要があります。

つまり、ビッグエンディアンとリトルエンディアンでは互換性がないため、フロントエンドマシンとバックエンドマシンから構成される Calendar Server 配備内では x86 プラットフォームマシンと Sparc プラットフォームマシンの両方を使用することはできません。

また、フロントエンドマシンとバックエンドマシンでの Solaris x86 オペレーティングシステムと Linux オペレーティングシステムの混在はテストされていないので、現在サポートされていません。

フロントエンドマシンおよびバックエンドマシンに Calendar Server をインストールする方法については、次の場所にある『Sun Java System Calendar Server 6 20004Q2 管理ガイド』を参照してください。

<http://docs.sun.com/app/docs/doc/817-7086?l=ja>

Linux プラットフォームのサポート

Java Enterprise System は Linux プラットフォームで実行できます。ユーザーの観点からの主な違いは、製品ディレクトリのインストール先のパス名です。Linux プラットフォームでは、Solaris プラットフォームとは異なるディレクトリにインストールされます。

次にデフォルトのインストール場所を示します。

- 12 ページの「Calendar Server」
- 13 ページの「Communications Express」
- 13 ページの「Delgated Administrator Utility (以前の User Management Utility)」

Calendar Server

次の表は、両方のプラットフォームで Calendar Server のディレクトリパスを比較しています。

表 3 Linux プラットフォームと Solaris プラットフォームのディレクトリパスの比較

Solaris ディレクトリ	Linux ディレクトリ
/opt/SUNWics5/cal/	/opt/sun/calendar
/etc/opt/SUNWics5/config	/etc/opt/sun/calendar/config
/var/opt/SUNWics5/	/var/opt/sun/calendar

Communications Express

Linux での Communications Express のデフォルトのインストール場所は次のとおりです。

`/opt/sun/uwc`

Delgated Administrator Utility (以前の User Management Utility)

`/opt/sun/comms/commcli`

OS パッチ

OS の必須パッチを適用してから、Calendar Server 6 2005Q1 をインストールする必要があります。必須パッチの一覧については、『Sun Java Enterprise System 2005Q1 リリースノート』を参照してください。

必要な権限

Solaris システム上で Sun Java™ Enterprise System インストーラまたは Calendar Server 6 2005Q1 設定プログラムを実行するには、スーパーユーザー (root) としてログインするか、スーパーユーザーになる必要があります。

Java Enterprise System インストーラ

Sun Java™ Enterprise System インストーラを使用して、Calendar Server 6 2005Q1 をインストールします。Java Enterprise System インストーラは、Calendar Server 6 2005Q1 などの Sun コンポーネント製品パッケージ、および各種製品が使用する共有コンポーネントをインストールします。

この節の内容は次のとおりです。

- [13 ページの「デフォルトのインストールディレクトリ」](#)
- [14 ページの「Linux のパッケージ名」](#)
- [14 ページの「Calendar Server 6 以前のバージョンからのアップグレード」](#)

デフォルトのインストールディレクトリ

次に Solaris パッケージ (SUNWics5 および SUNWica5) のデフォルトのインストールディレクトリ (cal_svr_base) を示します。

`/opt`

インストール後、Solaris Calendar Server のファイルは `/opt/SUNWics5/cal` に置かれます。

次に Linux パッケージ (コアおよび API) のデフォルトのインストールディレクトリ (cal_svr_base) を示します。

/opt

インストール後、Linux Calendar Server のファイルは /opt/sun/calendar に置かれます。

Linux のパッケージ名

表 4 は、さまざまな Calendar Server 関連のコンポーネントでの Linux のパッケージ名を示しています。

表 4 Calendar Server 関連コンポーネントでの Linux のパッケージ名

コンポーネント	パッケージ名
Calendar Server	sun_calendar-core sun-calendar-api ローカライズされたパッケージ: sun-calendar-core-es sun-calendar-core-ko sun-calendar-core-fr sun-calendar-core-zh_CN sun-calendar-core-de sun-calendar-core-ja sun-calendar-core-zh_TW
Communications Express	sun-uwc
Delegated Administrator Utility	sun-commcli-client sun-commcli-server

Calendar Server 6 以前のバージョンからのアップグレード

Sun Java Enterprise System インストーラを使用して Calendar Server をアップグレードしないでください。patchadd プロセスを使用する必要があります。Calendar Server 2003Q4 または 2004Q4 から現在のリリース 2005Q1 へアップグレードする方法については、『Sun Java Enterprise System 2005Q1 アップグレードと移行ガイド』を参照してください。『Sun Java Enterprise System 2005Q1 リリースノート』も参照してください。

これらのマニュアルおよびその他の関連マニュアルは、次の場所にあります。

http://docs.sun.com/coll/entsys_05q1

カレンダーデータベースのアップグレード

Calendar Server 6.0 と Berkeley DB バージョン 3.2.9 を一緒にインストールしている場合、現在の 4.2 バージョンへの変換は自動的に行われます。その他のデータベース移行プログラムを実行する必要はありません。

Berkeley DB バージョン 2.6 を使用する Calendar Server 5.x がインストールされている場合は、`cs5migrate` または `cs5migrate_recurring` ユーティリティを使用してカレンダーデータベースをバージョン 4.2 にアップグレードする必要があります。これらのユーティリティはテクニカルサポートに要求することにより入手できます。

Calendar Server 2.x が既にインストールされている場合は、現在のリリースに移行する前に、Calendar Server 5.x にアップグレードする必要があります。

移行については、次の場所にある『Sun Java System Calendar Server 6 2005Q1 管理ガイド』を参照してください。

<http://docs.sun.com/app/secure/doc/819-1476?l=ja>

インストール後の設定手順

Calendar Server 6 2005Q1 のインストールまたはアップグレードの後は、次のように設定する必要があります。

1. Directory Server セットアップスクリプト (`comm_dssetup.pl`) を実行して、Sun Java System Directory Server for Calendar Server スキーマを設定します。
2. Calendar Server 設定プログラム (`csconfigurator.sh`) を実行して、使用しているサイトの特定の要件を設定します。

詳細は、『Sun Java System Calendar Server 6 2005Q1 管理ガイド』を参照してください。

Calendar Server のデータとユーティリティの場所

Java Enterprise System リリース 2 の場合、Calendar Server は表 5 に示されているリンクを提供します。

表 5 ディレクトリの場所

ファイル名	Solaris の場合の場所	Linux の場合の場所 *
管理者用ユーティリティ: start-cal、stop-cal、csattribute、 csbackup、cscal、cscomponents、 csdb、csdomain、csexport、 csimport、csmonitor、csplugin、 cspurge、csrename、csresource、 csrestore、csschedule、csstats、 cstool、および csuser	/opt/SUNWics5/cal/sbin	/opt/sun/calendar/sbin
移行ユーティリティ: csmig、 csvdmig、および ics2migrate		
スクリプト: icsasm、 legbackup.sh、legrestore.sh、お よび private2public.pl		
管理者用ユーティリティ: csstart および csstop	/opt/SUNWics5/cal/lib	/opt/sun/calendar/lib
設定ファイル: ics.conf、 version.conf、counter.conf、およ び sslpassword.conf	インストール後 :/opt/SUNWics5/cal/config-tem plate	/opt/sun/calendar/config-templ ate
LDAP サーバー更新ファイル: 60iplanet-calendar.ldif、 ics50-schema.conf、および um50-common-schema.conf	設定中は、前述のディレクトリに 含まれるさまざまなファイルが、 選択した設定オプションで指定さ れた場所に移動されます。	
メール形式 (*.fmt) ファイル	/etc/opt/SUNWics5/cal/config/ language	/etc/opt/sun//calendar/config /language
	language は、en、de、es、fr、 ja、ko、zh-TW、または zh-CN で す。	

Linux インストーラは、"calendar" を /etc/opt/sun パス名に自動的に追加しません。設定時には、提供されるデフォルトのパスを受け入れないでください。パス名に "calendar" を追加します。

表 5 ディレクトリの場所 (続き)

ファイル名	Solaris の場合の場所	Linux の場合の場所 *
スキーマ IDIF ファイル: 20subscriber.ldif、 50ns-value.ldif、 50ns-delegated-admin.ldif、 55ims-ical.ldif、50ns-mail.ldif、 56ims-schema.ldif、 50ns-mlm.ldif、 60iplanet-calendar.ldif、 50ns-msg.ldif	/etc/opt/SUNWics5/cal/config/ schema comm_dssetup.pl は、これらの ファイルを Directory Server に書 き込みます。	/etc/opt/sun/calendar/config/s chema
ライブラリ (.so) ファイル	/opt/SUNWics5/cal/lib	/opt/sun/calendar/lib
SSL ユーティリティ: certutil およ び modutil		
セッションデータベース	/opt/SUNWics5/cal/lib/http	/opt/sun/calendar/lib/http
カウンタ統計情報ファイル: counter および counter.dbstat	/opt/SUNWics5/cal/lib/counter	/opt/sun/calendar/lib/counter
timezones.ics ファイル	/opt/SUNWics5/cal/data	/opt/sun/calendar/data
Linux インストーラは、"calendar" を /etc/opt/sun パス名に自動的に追加しません。設定時には、提供されるデフォルト のパスを受け入れられないでください。パス名に "calendar" を追加します。		

Directory Server のパフォーマンス

LDAP Directory Server のパフォーマンスを向上させたい場合、特に LDAP ディレクトリのカレンダー検索を使用している場合は、次の点を考慮してください。

- [17 ページの「LDAP Directory Server 属性のインデックス作成」](#)
- [18 ページの「サイズ制限およびロックスルー制限パラメータのチェックと設定」](#)

LDAP Directory Server 属性のインデックス作成

Calendar Server が LDAP Directory Server にアクセスするときのパフォーマンスを向上させるには、LDAP 設定ファイルの各種属性にインデックスを追加します。

設定プログラム comm_dssetup.pl は、オプションでインデックス作成を行います。

インデックス作成によってパフォーマンスがどれだけ変わったかを調べるには、次のテストを実行します。

1. ics.conf ファイル内の次のパラメータが「yes」に設定されていることを確認して、LDAP Directory Server のカレンダー検索を有効にします。

```
service.calendarsearch.ldap = "yes" (デフォルト)
```

2. 次の LDAP コマンドを実行します。

```
ldapsearch -b "base"  
"(&(icscalendarowned=*user*)(objectclass=icsCalendarUser))"
```

base は、Calendar Server のユーザーとリソースのデータが格納されている Directory Server の LDAP ベース DN です。*user* は、エンドユーザーが Calendar Express の「登録」>「カレンダーの検索」ダイアログで入力できる値です。

60,000 エントリを使ったテストでは、icsCalendarOwned のインデックスを作成しない場合、前述した検索に要した時間は 50 ~ 55 秒でした。インデックスを作成した後に検索に要した時間は、約 1 ~ 2 秒でした。

Directory Server のインデックスの追加については、次のサイトの Sun Java System Directory Server 5 2005Q1 のマニュアルを参照してください。

http://docs.sun.com/coll/DirectoryServer_05q1

サイズ制限およびルックスルー制限パラメータのチェックと設定

ルックスルー制限 (nsslapd-lookthroughlimit) パラメータとサイズ制限 (nsslapd-sizelimit) パラメータが適切な値に設定されているかどうかを判別するには、次のコマンドを実行してみます。

```
ldapsearch -b "base"  
"(&(icscalendarowned=*user*)(objectclass=icsCalendarUser))"
```

base は、Calendar Server のユーザーとリソースのデータが格納されている Directory Server の LDAP ベース DN です。*user* は、エンドユーザーが Calendar Express の「登録」>「カレンダーの検索」ダイアログで入力できる値です。

LDAP サーバーがエラーを返す場合は、nsslapd-sizelimit または nsslapd-lookthroughlimit パラメータの大きさが十分でない可能性があります。次のガイドラインに従って、これらのパラメータを設定してください。

- slapd.conf ファイルまたは同等のファイルの nsslapd-sizelimit パラメータの値は、必要な結果をすべて返すのに十分な大きさにする必要があります。大きさが十分でない場合、切り捨てが実行され、結果が表示されることがあります。
- slapd.ldbm.conf ファイルまたは同等のファイルの nsslapd-lookthroughlimit パラメータの値は、LDAP ディレクトリ内のすべてのユーザーとリソースの検索を完了するのに十分な大きさにする必要があります。可能な場合は、nsslapd-lookthroughlimit を -1 に設定します。そうすると、検索に制限がなくなります。

スキーマ 1 を使用する Communications Express

Communications Express のスキーマ 1 には 2 つの問題点があります。

- Communications Express 設定プログラムの実行前に Communications Express を Sun LDAP スキーマ 1 とともに実行する場合は、`ldapmodify` を使用して DC ルートノードを LDAP に追加する必要があります。エント리는次のようになります。

```
dn: o=internet
objectClass: organization
o: internet
description: Root level node in the Domain Component (DC) tree
```

- スキーマ 1 のユーザーの作成に使用するカレンダーユーティリティの `csuser` は、Calendar Express 用に設計されており、Communications Express に必要なアドレス帳サービスのユーザーをサポートしていません。

プロビジョニングツール

Calendar Server 用のユーザー、グループ、およびドメインのプロビジョニングツールには次の 2 つがあります。Delegated Administrator Utility と Calendar Server ユーティリティです。Delegated Administrator の詳細については、『Sun Java System Communications Services 6 2005Q1 Delegated Administrator ガイド』を参照してください。Calendar Server ユーティリティの詳細については、『Sun Java System Calendar Server 6 2005Q1 管理ガイド』を参照してください。

注 ユーザーのプロビジョニングを Access Manager Console から行わないでください。Access Manager Console でユーザーを作成してカレンダーサービスを割り当てることは可能ですが、この方法を使用すると、配備に対して予期しない悪影響が及ぼされる可能性があります。

定期的な予定用の新しい移行ユーティリティ

Sun Java System Connector for Microsoft Outlook などの一部のアプリケーションでは、定期的な予定および作業を例外とともにマスターコンポーネントとして指定する必要があります。6 2004Q2 より前の Calendar Server のバージョンでは、定期的な予定にこの形式を提供していませんでした。そのため、Calendar Server 6 2004Q2 には、`cs5migrate` ユーティリティの新しいバージョン、`cs5migrate_recurring` が取り入れられました。

`cs5migrate` ユーティリティは、次の作業を実行します。

- Calendar Server 5.x データを Calendar Server 6 に移行する
- カレンダーデータベースを Berkeley DB バージョン 2.6 からバージョン 4.2 へ更新する

- 移行ステータスをログファイル (csmigrate.log) に書き込む
- エラーを csmigrateerror.log. という名前のログに書き込む

さらに、cs5migrate_recurring ユーティリティは定期的な予定と作業のマスターレコードと例外レコードも作成します。将来的には、それらのレコードは Calendar Server によって自動的に生成されます。

データベースを移行する必要があるが Connector for Microsoft Outlook を使用する予定がない場合は、cs5migrate_recurring を実行する必要はありません。代わりに cs5migrate を実行します。

いずれのユーティリティのダウンロード場所およびマニュアルについても、テクニカルサポートに問い合わせてください。定期的な予定を移行し、Connector for Microsoft Outlook を使用する予定であるかどうかを必ずはっきり伝えてください。

警告 使用しているサイトに、限定仮想ドメインモードに設定されている Calendar Server の以前のバージョンがあるか、または Calendar Server の複数のインスタンスが同一マシンにあるときは、移行要件に関してご購入先の顧客サービス担当者に確認し、それらの要件をサポートする特定の移行ユーティリティがお手元にあることを確認してください。

また、最初にフルバックアップを取らずにデータベースを移行することは絶対にしないでください。

Calendar Server 6 のマニュアル

Calendar Server 6 には、次のマニュアルがあります。Part No. は括弧で囲まれています。

- 『Sun Java System Calendar Server 6 2005Q1 リリースノート』(819-1472)
- 『Sun Java System Calendar Server 6 2005Q1 管理ガイド』(819-1476)
- 『Sun Java System Calendar Server 6 2005Q1 Developer's Guide』(819-0025)
- 『Sun Java System Communications Express 6 2005Q1 管理ガイド』(819-1065)
- 『Sun Java System Communications Express 6 2005Q1 Customization Guide』(819-0116)
- 『Sun Java System Communications Services 6 2005Q1 User Management Utility Administration Guide』(819-0114)
- 『Sun Java System Communications Services 6 2005Q1 Schema Reference』(819-0113)
- 『Sun Java System Communications Services 6 2005Q1 Schema Migration Guide』(819-0112)
- 『Sun Java System Communications Services 6 2005Q1 Event Notification Service Guide』(819-0109)

Calendar Express 6 2005Q1 のオンラインヘルプは、Calendar Express ソフトウェアに付属しています。Communications Express 6 2005Q1 のオンラインヘルプは、Communications Express ソフトウェアに付属しています。

Calendar Server 6 2005Q1 のマニュアルは、次の Web サイトから入手できます。

http://docs.sun.com/coll/CalendarServer_05q1

ベータ版以降に修正された問題

表 6 は、2005Q1 ベータ版で報告され、リリース時点で修正された問題の一覧です。

表 6 修正済みの問題

問題番号	説明
5053566	Linux: Calendar Server ファイルがデフォルトで /etc/opt/sun/config 下にインストールされた。
5088142	ホットバックアップを設定したときに循環ロギングが無効になる。
5094350	csclean がファイルの終わりでエラーメッセージ 255 を返す (現在、LDAP_RES_SEARCH_RESULT が正常な返信とみなされている)。
5100012	Linux のみ : Java が見つからないと csconfigurator.sh が起動できない。
5105658	Linux: config ディレクトリ下のファイルが icsuser に所有されているすべてのファイルではない。
5107189	Calendar Server を起動できない。デフォルトのパス名が完全修飾されていない。
6173712	仮想ドメインモードでメール検索を設定すると、Calendar Server のエラー 29 がスローされる。メール検索は仮想ドメインモードではサポートされていません。代わりにユーザーおよびグループの LDAP を使用します。Revenue Release では、ics.conf ファイル内のメール検索設定は、仮想ドメインモードでは無視されます。
6174165	Linux: 設定プログラムによって例外がスローされる。
6177487	別のカレンダー属性が変更されると、ダブルブッキング属性は常にリセットされる。
6182461	EMEA 言語 : 予定と作業の作成、編集、削除を行うと、常に翻訳エラーによって JavaScript エラーが発生する。
6186706	(ドキュメント修正済み) ホストしているドメインを使用する場合、/etc/hosts には完全修飾ホスト名が格納されていなければならない。次に例を示します。 192.18.99.999 mycomputer.example.com mycomputer loghost

既知の問題と制限事項

ここでは、Calendar Server 6 のリリース時点で知られている重要な問題の一覧表を示します。

- [22 ページの「制限事項」](#)
- [23 ページの「報告されている問題」](#)

制限事項

現時点で知られている制限事項は以下のとおりです。

- [22 ページの「値が複数のユーザー設定のすべてのインスタンスの削除」](#)
- [22 ページの「クラスタ化された環境でインストールされたパッチの検索」](#)
- [23 ページの「ポップアップブロッカー」](#)
- [23 ページの「スキーマ 1 モードの Communications Express のユーザーの作成」](#)
- [23 ページの「複数のドメイン \(ホストしているドメイン\)」](#)

値が複数のユーザー設定のすべてのインスタンスの削除

制限事項: 各 `set_userprefs` コマンドで、値が複数ある設定のインスタンスが 1 度に 1 つずつしか削除されない。

回避策: 値が複数あるユーザー設定のすべてのインスタンスを削除するには、インスタンスごとに 1 回ずつ `set_userpref` コマンドを実行する必要があります。

たとえば、次のように実行します。`get_userprefs` を実行して、すべてのユーザー設定の一覧を表示します。`icsSubscribed` のように、1 つの設定に対して複数の値が存在する場合、一覧に表示されたそれぞれの値を削除するために `set_userprefs` コマンドを 1 回ずつ実行します。

クラスタ化された環境でインストールされたパッチの検索

制限事項: クラスターの個々のノードのインストール内容を示すクラスター固有の `showrev` コマンドが存在しない。これは、Calendar Server に限らず一般的な問題です。グローバルファイルシステムにインストールされたどの製品でも同じ問題に直面します。

このことは、Calendar Server のアップデート時に問題となります。Calendar Server のインストールされたすべてのノードにパッチを適用する必要があるためです。また、ノードに Calendar Server がインストールされていなければパッチを適用できません。Calendar Server のインストールされているノードがよくわからない場合は、少なくとも混乱することが予想され、どこに Calendar Server をインストールしたかを探し出すために時間を費やすことになります。

回避策: 次のコマンドを実行して、Calendar Server がインストールされているすべてのノードを確認します。`pkgparam -v SUNWics5 | grep ACTIVE_PATCH`

ポップアップブロッカー

制限事項: ポップアップブロッカーを有効にすると、一部の Calendar Server ウィンドウが表示されません。

回避策: カレンダー URL のポップアップブロッカーを無効にして、すべての Calendar Server ウィンドウが表示されるようにします。

例外: Norton Inet Security AD_BLOCKER と Mozilla の組み込み POP_BLOCKER はどちらも、Calendar Server ウィンドウには影響を及ぼしません。

スキーマ 1 モードの Communications Express のユーザーの作成

制限事項: `csuser` ユーティリティでは、アドレス帳用に作成したユーザーが有効にならない。

回避策: `ldapmodify` を使用してユーザーを有効にします。

複数のドメイン (ホストしているドメイン)

制限事項: 設定プログラム `csconfigurator.sh` は、単一のドメインしか設定しない。

回避策: 複数ドメインのカレンダー環境 (仮想ドメインまたはホストしているドメインと呼ばれる) が必要な場合、自分でドメインを追加する必要があります。このためには、Delegated Administrator Utility (以前の User Management Utility) を使用するか、または、Sun LDAP スキーマ 1 をまだ使用している場合には `csdomain` ユーティリティを使用します。『Sun Java System Calendar Server 6 2005Q1 管理ガイド』の「ホストしているドメインの設定」および「ドメインの管理」を参照してください。

報告されている問題

表 7 は、この製品について報告されている問題の一覧です。

表 7 2005Q1 の既知の問題

問題番号	説明
4526765	Calendar Server ユーティリティ <code>csca1</code> は、コマンド内で指定した数に関係なく、一度に 2 つまでしか所有者をカレンダーに追加しない。
4932211	マルチ CPU 環境では、 <code>enpd</code> への接続を同時に急激に開いたり閉じたりすると、処理が終了される。
4958242	ユーザーが予定を変更するときに、本日の予定と今後のすべての予定を変更するオプションを選択すると、これまでの予定がすべて削除され、UI に表示されなくなる。

表 7 2005Q1 の既知の問題 (続き)

問題番号	説明
5027772	設定プログラムの「取得する」ではベース DN が取得されない。これは、インストールルートをフェッチします。ルートの後続部分を追加してベース DN を指定する必要があります。
5033934	設定後、calmaster のログインに失敗する。
5082520	deletecomponents_by_range WCAP コマンドが正常に実行された後、UI でコンポーネントを表示できない。ただし、WCAP fetch コマンドは削除されたコンポーネントを正常に取り出している。これは現在評価中です。現時点では、修正のための十分な情報が入手できていません。
6179278	ホットバックアップログファイルが、他のログファイルのように ics.conf 設定によってページされない。ファイルサイズを最小限にするため、冗長を少なくします。デフォルトでは冗長レベル 3 です。
R6186298	ホストされたドメインのスキーマ 1 モードでは、DC ツリーが見つからないか、正しく作成されていない場合、カレンダーユーティリティが失敗する可能性がある。カレンダーを作成、あるいは管理する前に DC ツリーのノードを作成する必要があります。RFE..
6211629	Linux: 日本語ローケルの RedHat Linux での問題。Calendar Server 設定プログラム csconfigurator.sh を GUI モードで実行すると、いくつかの入力ボックスの幅が狭すぎて値を入力できない。回避策: ウィンドウのサイズを調整して入力フィールドの幅を拡張します。
6213625	顧客が patchadd を使用して以前のバージョンからアップグレードした場合、更新済みの共有コンポーネントがインストールされていなければ、パッチプログラムの実行が拒否されなくてはならない。
R6216869	DWP 処理の実行中に DWP が無効にされると、stop-cal によってこの処理が停止されない。stop-cal は、有効なサービスだけでなくすべてのサービスを停止する必要がある。
6216877	あいまいなエラーメッセージ。ホストされたドメイン環境で、csdomain に渡された basedn が存在しない場合。実際に受信するメッセージは、「 "FAIL: icsLdapServer: Null argument to function."」です。このタイプのエラーメッセージは、もともとは何段階も下のレベルで作成され、多くのさまざまな状況が原因として考えられるため、あいまいです。エラーを単純に渡すのではなく、高レベルのプログラムがエラーメッセージをさらに高レベルに上げていく前に、解釈する必要があります。
6219126	カレンダーサーバーに格納されるときに、description フィールドの先頭の空白文字が削除される。
6219300	csrename ユーティリティによって deletlog 内のエントリ名が変更されないため、これらのエントリが「孤立」する。
6219332	サイレント状態にしても、設定プログラムにより質問される。
6219906	仮想ドメインモードで、ics.conf ファイル内に maillookup が設定されると、WCAP エラーが返される。回避策: ics.conf ファイルの maillookup パラメータをコメントアウトします。パッチ 1 で修正されました。修正: 仮想ドメインモードでは、ics.conf ファイルの maillookup は無視され、ugldap が使用されます。
6220219	ホストされたドメインに属性を追加したり、そこから属性を削除しようとする、csdomain ユーティリティによってエラーが提示される。

表 7 2005Q1 の既知の問題 (続き)

問題番号	説明
6221009	Linux: RedHat Linux 3.0 で受信する電子メール通知に件名がない。
6221064	get_freebusy コマンドは、ホストされたドメインのカレンダ上の freebusy 情報を返さない。
R6221452	ホストされたドメインでは個別に SSL を有効化または無効化することができない。
6221999	icsCalendarDomains 属性を追加しようとする、csdomain ユーティリティが LDAP エラー 89 (不正なパラメータ) を送信する。

再配布可能なファイル

Sun Java System Calendar Server 6 2005Q1 には、次のファイル群が含まれます。Sun は、お客様に対して、これらのファイルをバイナリ形式で複製および配布するための非独占的で譲渡不能な、制限された使用権を許諾します。

また、一覧のヘッダファイルおよびクラスライブラリは、複製および配布されたバイナリファイルと Sun のソフトウェア API とのインターフェイスを可能にすることのみを目的として、コピーおよび使用できますが、修正はできません。

コーディング例は、前述のバイナリファイルの作成に従って参照することのみを目的として提供されています。

Calendar Server 用の再配布可能なファイルはすべてプラグイン API 用で、CSAPI と呼ばれます。API については、次の場所にある『Sun Java System Calendar Server 6 2005Q1 Developer's Guide』に説明があります。

http://docs.sun.com/coll/CalendarServer_04q2

以下のファイルでは、cal_svr_base は Calendar Server がインストールされたディレクトリです。Solaris のデフォルトは /opt/SUNWics5/cal、Linux のデフォルトは /opt/sun/calendar です。

再配布可能なファイルは、cal_svr_base/csapi の以下のサブディレクトリにあります。

- [authsdk](#)
- [bin](#)
- [classes](#)
- [include](#)
- [plugins](#)
- [samples](#)

authsdk

次にこのサブディレクトリ (cal_svr_base/csapi/authsdk/) に含まれる再配布可能なファイルを示します。

```
cgiauth.c
expapi.h
login.html
nsapiauth.c
```

bin

次にこのサブディレクトリ (cal_svr_base/csapi/bin/) に含まれる再配布可能なファイルを示します。

```
libcsapi_xpcom10.so
libicsexp10.so
```

classes

次にこのサブディレクトリ (cal_svr_base/csapi/classes/) に含まれる再配布可能なファイルを示します。

```
ens.jar
jms.jar
```

include

次にこのサブディレクトリ (cal_svr_base/csapi/include/) に含まれる再配布可能なファイルを示します。

```
IIDS.h                                nsIEnumerator.h
csIAccessControl.h                    nsIEventQueueService.h
csIAuthentication.h                   nsIFactory.h
csICalendarDatabase.h                 nsIPtr.h
```

csICalendarLookup.h	nsIServiceManager.h
csICalendarServer.h	nsIServiceProvider.h
csIDBTranslator.h	nsISizeOfHandler.h
csIDataTranslator.h	nsISupports.h
csIMalloc.h	nsISupportsArray.h
pluginscsIPlugin.h	nsMacRepository.h
csIQualifiedCalidLookup.h	nsProxyEvent.h
csIUserAttributes.h	nsRepository.h
mozIClassRegistry.h	nsString.h
mozIRegistry.h	nsTraceRefcnt.h
nsAgg.h	nsVector.h
nsCOMPtr.h	nsUnicharUtilCIID.h
nsCRT.h	nsXPComCIID.h
nsCom.h	nsXPComFactory.h
nsDebug.h	nscore.h
nsError.h	pasdisp.h
nsHashtable.h	publisher.h
nsIAtom.h	subscriber.h
nsICaseConversion.h	xcDll.h
nsICollection.h	xcDllStore.h
nsID.h	

plugins

このディレクトリ (`cal_svr_base/csapi/plugins/`) では、次のサブディレクトリに再配布可能なファイルがあります。

- [accesscontrol](#)
- [authentication](#)
- [datatranslator](#)
- [userattributes](#)

accesscontrol

次にこのサブディレクトリ (`cal_svr_base/csapi/plugins/accesscontrol/`) に含まれる再配布可能なファイルを示します。

```
csAccessControl.cpp
csAccessControl.h
csAccessControlFactory.cpp
```

authentication

次にこのサブディレクトリ (`cal_svr_base/csapi/plugins/authentication/`) に含まれる再配布可能なファイルを示します。

```
csAuthentication.cpp
csAuthentication.h
csAuthenticationFactory.cpp
```

datatranslator

次にこのサブディレクトリ (`cal_svr_base/csapi/plugins/datatranslator/`) に含まれる再配布可能なファイルを示します。

```
csDataTranslator.cpp
csDataTranslator.h
csDataTranslatorFactory.cpp
```

userattributes

次にこのサブディレクトリ (`cal_svr_base/csapi/plugins/userattributes/`) に含まれる再配布可能なファイルを示します。

```
csUserAttributes.cpp
csUserAttributes.h
csUserAttributesFactory.cpp
```

samples

このディレクトリ (`cal_svr_base/csapi/samples/`) では、以下のサブディレクトリに再配布可能なファイルがあります。

- [authentication](#)
- [datatranslator](#)
- [ens](#)
- [userattributes](#)

authentication

次にこのサブディレクトリ (`cal_svr_base/csapi/samples/authentication/`) に含まれる再配布可能なファイルを示します。

```
authlogon.c
authlogon.h
authtest.c
csAuthenticationLocal.cpp
csAuthenticationLocal.h
csAuthenticationLocalFactory.cpp
```

datatranslator

次にこのサブディレクトリ (`cal_svr_base/csapi/samples/datatranslator/`) に含まれる再配布可能なファイルを示します。

```
csDataTranslatorCSV.cpp
```

再配布可能なファイル

csDataTranslatorCSV.h

csDataTranslatorCSVFactory.cpp

ens

次にこのサブディレクトリ (cal_svr_base/csapi/samples/ens/) に含まれる再配布可能なファイルを示します。

apub.c

asub.c

rpub.c

rsub.c

userattributes

次にこのサブディレクトリ (cal_svr_base/csapi/samples/userattributes/) に含まれる再配布可能なファイルを示します。

csUserAttributesDB.cpp

csUserAttributesDB.cpp

csUserAttributesDBFactory.cpp

Communications Express

Sun Java™ System Communications Express バージョン 6 2005Q1 は、カレンダー、アドレス帳、およびメールの 3 つのクライアントモジュールから構成される、統合された Web ベースのコミュニケーションおよびコラボレーションクライアントを提供します。カレンダーおよびアドレス帳クライアントモジュールは、あらゆる Web コンテナに単一のアプリケーションとして配備され、統合 Web クライアント (Unified Web Client、UWC) として全体的に参照されます。Messenger Express は、Messaging Server の HTTP サービスを使用する、スタンドアロンの Web インタフェースのメールアプリケーションです。

この節の内容は次のとおりです。

- [サポートされているブラウザ](#)
- [インストールに関する注意事項](#)
- [既知の問題と制限事項](#)

サポートされているブラウザ

詳細については、ハードウェアおよびソフトウェアの推奨事項にある「[クライアントコンピュータ用の推奨ブラウザ](#)」を参照してください。

インストールに関する注意事項

以下は、Communications Express が依存するサービスです。

1. Directory Server - Sun Java™ System Directory Server バージョン 5.2 をインストールする。
2. Calendar Server - Sun Java™ System Calendar Server バージョン 6.2 をインストールする。
3. Web Server - Sun Java™ System Web Server バージョン 6.1 SP4 をインストールする。
4. Messaging Server - Sun Java™ System Messaging Server 6.2 をインストールする。
5. Access Manager - Sun Java™ System Access Manager 6.2 をインストールする。
6. Application Server - Sun Java™ System Application Server 8.1 をインストールする。

注 Communications Express はここに記載されているサーバーのバージョンだけでテストされているため、これらのバージョンでのみサポートされています。Communications Express Configurator は、Application Server 8.1 用の Domain Administration Server (DAS) 配備のみをサポートしています。

Sun Java System Communications Express のインストールおよび設定方法については、『Sun Java™ Systems Communications Express 管理ガイド』の第 2 章「Communications Express のインストールおよび設定」を参照してください。

既知の問題と制限事項

ここでは、Communications Express 6 2005Q1 に関する既知の問題の一覧表を示します。次の内容について説明します。

- [一般的な問題](#)
- [設定ツールの問題](#)
- [カレンダーの問題](#)
- [メールの問題](#)
- [アドレス帳の問題](#)
- [オプションの問題](#)
- [ローカライズに関する問題](#)

一般的な問題

ログインページに不正なバージョンが表示される。(6213879)

「ログイン」ページでバージョンリンクをクリックすると、Sun Java System Communications Express 6 2005Q1 ではなく、Sun Java System Communications Express 6 2004Q4 とバージョン表示されます。

Communications Express にログインした後にユーザーが表示を選択するオプションがない。(6195844)

デフォルトの表示を選択するオプションが「グローバルオプション」から削除されました。オンラインヘルプにはこの変更が反映されていません。

オプションからアドレス帳までたどっていくときに、Communications Express が不正なエラーメッセージを表示する。(6179023)

オプションからアドレス帳までたどっていくときに、Communications Express が不正なエラーメッセージを表示します。このエラーメッセージにより、選択言語が変更されたと指摘されます。言語設定は何も変更されていないので、このエラーメッセージは誤りです。このメッセージは無視しても問題ありません。

`uwc.logging.enable` 内に空白文字がないと、Communications Express がログを生成しない。(5060300)

`uwc.logging.enable=yes` (= の後に空白がない) と入力した場合、Communications Express がログを生成しません。`uwc.logging.enable= yes` (= の後に空白あり) と入力した場合のみログが生成されます。

ユーザーが認証されている場合でも、URL に完全修飾ホスト名が必要である。(5008104)

完全修飾ホスト名が指定されていないと、Communications Express は完全に設定できません。ユーザーが認証されている場合でも、URL が完全修飾ホスト名でなければ Cookie にドメイン名が設定されません。

回避策

常に完全修飾ホスト名を使用してアプリケーションにアクセスします。

設定ツールの問題

ここでは、Communications Express の設定ツールの既知の問題の一覧表を示します。

設定時に誤った警告メッセージが表示される。(6206941)

Communications Express は、設定時に誤った警告メッセージを表示します。これらの警告メッセージにより、Communications Express の共有コンポーネントがいくつかインストールされていないと指摘されます。これらの警告メッセージは誤りなので、無視しても問題ありません。

Communications Express Configurator の CLI モードを使用して設定を行う場合でも、DISPLAY 変数を設定する必要があります。(6199114)

CLI モードで設定を行う場合、DISPLAY 変数が設定されていないと、Communications Express Configurator によって例外がスローされます。

jdk1.5 と設定された DISPLAY 変数が存在しないと、Communications Express 設定プログラムによって例外がスローされる。(6197740)

-nodisplay オプションが有効になっていても、jdk1.5 と設定された DISPLAY 変数が存在しないと、Communications Express 設定プログラムによって例外がスローされます。これは jdk1.5 のバグによるものです。

Communications Express の設定ツールでは設定の取り消しができない。(5104756)

Communications Express Configurator では、配備取消し、設定時のファイルの削除、および実行時に作成されたファイルの削除はできません。

回避策

Communications Express の設定を取り消すには、次の手順を実行します。

1. Communications Express パッケージを削除します。たとえば、Solaris では次のように入力します。

```
pkgrm SUNWuwc.
```
2. 配備ディレクトリを削除します。
3. Web Server または Application Server の server.xml ファイルから、WEBAPP エントリを削除します。

サイレント設定が動作しない。(5008791)

Communications Express では、対話形式でのみ設定を実行できます。サイレント設定はできません。サイレントモードで設定しようとする、「ディレクトリ名を空白のままにすることはできません。これは必須フィールドです。もう一度入力してください。」というメッセージが表示されます。

Communications Express Configurator: ホストエイリアスが解決されない場合、devinstall がコアダンプする。(5028906)

システムにホスト名エイリアスが設定されていないと、Communications Express 設定プログラムは設定プロセスを完了できません。

回避策

システムに、1 つまたは複数のホスト名エイリアスが設定されていることを確認します。

UNIX システム上に 1 つまたは複数のホスト名エイリアスを設定するには、次の手順を実行します。

1. /etc/nsswitch.conf ファイルの hosts を次のように設定します。

```
hosts: files dns nis
```

この設定はネームサービスに対して、ホスト名とホストエイリアスの解決に使用する検索順序を示します。ネームサービスの検索順序は、files、dns、nis です。

2. /etc/hosts ファイルで、使用コンピュータの IP アドレスに対して 2 つ以上のホスト名が定義されていることを確認します。

たとえば、システムの IP アドレスが 129.158.230.64 の場合、/etc/hosts ファイルに IP アドレスを次のように設定できます。

```
129.158.230.64 budgie.siroe.varrius.com budgie
```

または

```
129.158.230.64 budgie.siroe.varrius.com budgie loghost
```

IP アドレス の誤った設定例:

```
129.158.230.64 budgie
```

GUI 設定の入力フィールドの位置を、右揃えにするべきではない。(4996723)

設定ウィザードを英語以外の言語で起動した場合、フィールド名およびブラウザボタンが切り捨てられるかまたは表示されません。

回避策

設定パネルのサイズを変更して、コンテンツが正しく表示されるようにします。

Communications Express のコンポーネントが、0 バイトと表示される。(4982590)

Communications Express のメールおよびカレンダーコンポーネントを表示する間、Communications Express の設定ツールはコンポーネントサイズを 0 バイトと表示します。

カレンダーの問題

カレンダーにインポートした予定と作業を編集できない。(6199583)

ユーザーが自分のカレンダーで予定と作業を作成した場合でも、インポートした予定と作業は編集できません。

「カレンダーの詳細を表示」のオンラインヘルプがアプリケーションの動作と一致しない。(6149493)

カレンダーを選択して「表示」をクリックしても、「カレンダーの詳細を表示」ウィンドウは開きません。代わりに、選択したカレンダーが開きます。

カレンダーでは、すべての表示で 2006 年より先の年が選択できない。(5086083)

Communications Express では、2006 年までの年しか選択できません。すべての表示において 2006 より先の年は選択できません。

定期的な予定のインスタンス数を変更すると、一連の予定の開始日を変更される。(5078220)

Communications Express で 2 つの定期的な予定を作成し、2 番目の (後の) 予定のインスタンス数を変更すると、一連の予定の開始日が新しい開始日に移行してしまいます。

カレンダー表示の年月日の形式が簡体字中国語に翻訳されない。(5025449)

カレンダー表示の年および日の形式は簡体字中国語に翻訳されません。ただし、「月」の表示は簡体字中国語に正しく翻訳されます。

メールの問題

アドレス帳から選択したアドレスがメールの「作成」ウィンドウに表示されない。(6208731)

アドレス帳からいくつかのアドレスを選択し、アドレス帳から電子メールを送信するオプションを選択します。ポップアップ表示される「作成」ウィンドウの「To」フィールドに、アドレス帳で選択したアドレスは表示されません。

ユーザーまたはドメインの状態を「overquota」に設定すると、メールにアクセスできない。(6207018)

ドメインの mailDomainStatus 属性か、mailUserStatus 属性を「overquota」に設定すると、Communications Express に「メール」タブが表示されません。

添付ファイルのサイズが大きすぎると、「Page Not Found」というエラーが表示される。(6193396)

このエラーは、デフォルトの最大サイズ (5M バイト) を超えるファイルを添付しようとする则表示されます。

Mozilla と Netscape では、RTF モードで編集できない。(6183540)

「新規メッセージ」ウィンドウを開くと、デフォルトでテキスト領域は RTF モードになっています。

Communications Express がポート 80 以外のポートで実行されている場合、ユーザーはテキスト領域で何も編集することができません。Communications Express がポート 80 で実行されているときに、標準テキストモードとリッチテキストモードの間で切り替えを行うと、これまでに作成したテキストが失われます。

標準テキストモードでスペルチェックを使用すると、意味のない文字が追加される。(6179771)

いくつかスペルミスのあるメールを標準テキスト形式で作成し、「スペルチェック」をクリックします。スペルの誤りを訂正し、「編集」をクリックして「新規メッセージ」ウィンドウに戻ります。訂正したどの単語にも「 」が追加されていることがわかります。

「新規メッセージ」ウィンドウをクリックすると、空白のウィンドウが表示される。(6178354)

アドレス帳からグループをクリックして、さらにグループからユーザーを選択します。「詳細の表示」をクリックして、「新規メッセージ」をクリックすると、空白のウィンドウが表示されます。

「スペルチェック」をクリックすると HTML コンテンツが表示される。(5100222)

「新規メッセージ」ウィンドウでいくつか文字を入力して、右方向にインデントします。ここで「スペルチェック」をクリックすると、HTML コンテンツ全体が表示されます。

「外部メールの収集」ポップアップウィンドウが小さすぎて、ローカライズ後のユーザーインターフェースのすべての要素を表示できない。(5058226)

「収集」、「取消し」、「ヘルプ」ボタンが表示されません。

Windows 2000 上の Netscape 7.1 で、メールの「新規メッセージ」ウィンドウから受信者を追加した場合、ユーザーが追加されない。(5041977)

「新規メッセージ」ウィンドウの宛先アイコンをクリックして、検索対象の有効なアドレス帳のユーザーを入力します。宛先チェックボックスを有効にして「受信者を追加」をクリックすると、Javascript エラー「inputObj is null」が表示され、ユーザーが電子メールメッセージに追加されません。このバグは、Windows 2000 上の Netscape 7.1 でのみ報告されています。

メールフィルタ：設定が正しく保存されていない。(5032888)

メールフィルタの詳細を編集モードで表示している場合、「メッセージを保存するフォルダ:」および「転送するメールアドレス:」の設定は正しく保存されません。

メールフィルタ：メールフィルタを特定の条件で作成すると、アプリケーションエラーが表示される。(5032833)

メールフィルタを特定の条件で作成すると、Communications Express によって次のエラーによるエラーページが表示されます。

Application Error

com.ipplanet.jato.NavigationException: Exception encountered during forward

Root cause = [java.lang.StackOverflowError]

アドレス帳の問題

Communications Express を Sun Java System Application Server 8.1 Enterprise Edition 上に配備した場合、Outlook のアドレス帳からの認証に失敗する。(6189264)

Communications Express を Sun Java System Application Server 8.1 Enterprise Edition 上に配備して、Outlook Connector で新しいプロファイルを作成します。そのプロファイルにログインしようとする、アドレス帳へのログインに失敗し、ユーザーはパスワードを求められます。アドレス帳へのログインは何度も失敗します。ただし、ユーザーは Web UI を使用してアドレス帳にログインすることができます。

アドレス帳では CSV 形式でのグループインポートはサポートされていない。(6182437)

グループインポートは LDIF 形式でのみサポートされています。その他の形式には、グループをエクスポートするための標準形式 (他のアプリケーションもエクスポートできる形式) がありません。連絡先が正常にインポートされたときのメッセージは、赤で表示されます。

vlv_paging=true の場合でも、アドレス帳は LDAP VLV コントロールを使用しない。(5052474)

db_config.properties で vlv_paging=true と設定しても、アドレス帳は LDAP 検索時に Virtual List View コントロールを使用しません。これは、VLV インデックスが設定されている Directory 配備のパフォーマンスに影響する場合があります。

アドレス帳名を、defaultps/dictionary-<lang>.xml によってセッションごとにローカライズできない。(4995472)

アドレス帳に最初にアクセスする時に、解決されたセッション言語とドメイン固有の defaultps/dictionary-<lang>.xml に基づいてローカライズされた値が割り当てられるために、アドレス帳名をローカライズできません。

「アドレス帳オプション」ページに入力した「名前」および「説明」は、「アドレス帳」タブページに表示される「現在のアドレス帳」ドロップダウンリストには表示されません。

オプションの問題

「オプション - グローバル設定」のオンラインヘルプには、「ログイン後のデフォルトの表示」の下に次の情報が表示されます。「ログイン後に表示するデフォルトのページをドロップダウンリストから選択します。選択可能なオプションは、「電子メール」、「カレンダー」、および「アドレス帳」です。」「オプション」ページにはデフォルトのアプリケーションを選択するためのオプションは表示されません。しかし、オンラインヘルプにはこの変更が反映されていません。

ローカライズに関する問題

次に示す既知の問題は、必ずしもローカライズ固有の問題ではありません。

フランス語ロケールでメールからユーザーをアドレス帳に追加しようとする、Javascript エラーが表示される。(6216191)

選択言語をフランス語にして Communications Express にログインします。任意のメールを開き、送信者の電子メールアドレスをクリックします。Javascript エラーが表示され、ユーザーをアドレス帳に追加することができません。

フランス語ロケールでは、アポストロフィとアクセント記号が文字化けすることがある。(6207966)

フランス語ロケールでは、アポストロフィとアクセント記号が文字化けすることがあります。

「新規メッセージ」ウィンドウで英語表示される文字列がある。(6204672)

「新規メッセージ」ウィンドウでは、「Compose title」、「to」、「cc」、「bcc」、「Attachments」、「Subject」、「Plain text」、「Rich Text」などの文字列が英語で表示されます。この現象は、日本語、韓国語、簡体字中国語、繁体字中国語ロケール用の Mozilla 1.x、Netscape 7.x、Mozilla FireFox を使用したときに起こります。

日本語またはフランス語で大きなサイズのメールを送信すると文字化けする。(6201676)

大きなサイズの電子メールメッセージを受信した場合、ユーザーはメッセージ内の添付のリンク (text/html または text/plain) をクリックする必要があります。この添付ファイル内に非 ASCII 文字が含まれている場合、新しく開いたブラウザウィンドウに文字化けしたデータが表示されることがあります。この問題は次回提供するパッチで修正される予定です。

回避策:

ブラウザのメニューから、適切なエンコードを手動で選択します。

選択言語を日本語、韓国語、簡体字中国語、または繁体字中国語にした場合、Mozilla 1.x、Netscape 7.x、Firefox の「新規メッセージ」ウィンドウでいくつかの文字列が英語で表示される。(6200222)

「Compose title」、「To」、「cc」、「bcc」、「Attachments」、「subject」、「Plain text」、「Rich Text」が選択した言語ではなく英語で表示されます。

Communications Express のオンラインヘルプのローカライズバージョンが最新ではない。(6199833)

Communications Express のオンラインヘルプの英語バージョンがヘルプツールの最新バージョンです。

ローカライズされた Outlook から、連絡先を CSV 形式でインポートできない。(6186520)

ローカライズされた Outlook から、連絡先を CSV 形式でインポートしようすると、アドレス帳に次のエラーが表示されます。「_Personal Address Book 中の csvus エントリタイプをインポート中にエラーが発生しました。送信したファイルは、タイプが正しくないか、破損しているか、すでに存在しているデータを含んでいる可能性があります。」

「送信済み」フォルダの韓国語の翻訳が正しくない。(6182987)

韓国語で、「送信済み」フォルダの名前が、「送信日付」と翻訳されています。

Messenger Express: Internet Explorer 上の Javascript エラーによって、Messenger Express が空白ページを表示することがある。(6181721)

英語以外の言語で Internet Explorer を使用している場合、Messenger Express によって空白ページと Javascript エラーが表示されることがあります。

回避策:

次に示すメタタグを Communications Express HTML ファイルに挿入します。通常、これは次の場所にインストールされています。

/opt/SUNWmsgsr/config/html/lang (設定前) および /var/opt/SUNWmsgsr/config/html/lang (設定後)

```
<meta http-equiv="content-type" content="text/html; charset=utf-8">
```

カレンダー表示の年と日の形式が簡体字中国語に翻訳されない。(5025449)

カレンダー表示の年と日の表示形式が簡体字中国語に翻訳されません。ただし、「月」の表示は簡体字中国語に正しく翻訳されます。

Delegated Administrator Utility

ここでは、Communications Services Delegated Administrator Utility (以前の Communications Services User Management Utility) の既知の問題について説明します。

注 Delegated Administrator コンソール (GUI) は Calendar Server をサポートしていません。
Delegated Administrator Utility (コマンド行のみ) を使用してください。

commadmin ユーティリティを LDAP ディレクトリに対してスキーマ 2 互換モードで実行できるようにするには、手動による手順が必要である。(5042801)

commadmin を、LDAP ディレクトリ上でスキーマ 2 互換モードで動作させるには、以下に示す手順を手動で実行する必要があります。

回避策

次の 6 つの手順を実行します。

1. 次の ACI を OSI ルートに追加します。ugldapbasedn を、使用するユーザーグループのサフィックスに必ず置き換えてください。

```
#
# acis to limit Org Admin Role
#
#####
# dn: <local.ugldapbasedn>
#####
dn: <ugldapbasedn>
changetype:modify
```

```

add: aci
aci: (target="ldap:///($dn),<ugldapbasedn>") (targetattr="*")
(version 3.0; acl "Organization Admin Role access deny to org node"; deny
(write,add,delete) roledn = "ldap:///cn=Organization Admin Role,($dn),<ugldapbasedn>");

dn: <ugldapbasedn>
changetype:modify
add: aci
aci: (target="ldap:///($dn),<ugldapbasedn>") (targetattr="*") (version 3.0; acl
"Organization Admin Role access allow read to org node"; allow (read,search)
roledn = "ldap:///cn=Organization Admin Role,($dn),<ugldapbasedn>");

```

2. 次の ACI を DC ツリーのルートサフィックスに追加します。 *dctreebasedn* を DC ツリーのルートサフィックスに、 *ugldapbasedn* をユーザーグループのサフィックスに必ず置き換えてください。

```

#
# acis to limit Org Admin Role
#
#####
# dn: <dctreebasedn>
#####
dn: <dctreebasedn>
changetype:modify
add: aci
aci: (target="ldap:///($dn),<dctreebasedn>") (targetattr="*")
(version 3.0; acl "Organization Admin Role access deny to dc node";
deny (write,add,delete) roledn = "ldap:///cn=Organization Admin
Role,($dn),<ugldapbasedn>");

dn: <dctreebasedn>
changetype:modify
add: aci
aci: (target="ldap:///($dn),<dctreebasedn>") (targetattr="*")
(version 3.0; acl "Organization Admin Role access allow read to dc node"; allow
(read,search) roledn = "ldap:///cn=Organization Admin Role,($dn),<ugldapbasedn>");

dn: <dctreebasedn>
changetype:modify
add:aci
aci: (target="ldap:///<dctreebasedn>") (targetattr="*")
(version 3.0; acl "S1IS Proxy user rights"; allow (proxy)
userdn = "ldap:///cn=puser,ou=DSAME Users,<ugldapbasedn>");

dn: <dctreebasedn>
changetype:modify
add:aci
aci: (target="ldap:///<dctreebasedn>") (targetattr="*")
(version 3.0; acl "S1IS special dsame user rights for all under the root suffix"; allow
(all) userdn = "ldap:///cn=dsameuser,ou=DSAME Users,<ugldapbasedn>");

```



```
dn: <dctreebasedn>
changetype:modify
add:aci
aci: (target="ldap:///<dctreebasedn>") (targetattr="*")
(version 3.0; acl "S1IS Top-level admin rights";
allow (all) roledn = "ldap:///cn=Top-level Admin Role,<ugldapbasedn>");)
```

3. AMConfig.properties ファイルの com.ipplanet.am.domaincomponent プロパティを、DC ツリーのルートサフィックスに設定します。たとえば、<IS_base_directory>/lib/AMConfig.properties ファイルの次の行を変更します。

変更前

```
com.ipplanet.am.domaincomponent=o=isp
```

変更後

```
com.ipplanet.am.domaincomponent=o=internet
```

4. Access Manager で、互換性モードを使用可能にします。Access Manager コンソールの「管理」サービスページで、「ドメインコンポーネントツリーを有効」チェックボックスにチェック (有効) します。

5. 次の例のように、inetdomain オブジェクトクラスをすべての DC Tree ノード (dc=com,o=internet など) に追加します。

```
/var/mps/serverroot/shared/bin 298% ./ldapmodify -D "cn=Directory Manager" -w password
dn: dc=com,o=internet
changetype:modify
add:objectclass
objectclass: inetdomain
```

6. Web コンテナを再起動します。

User Management Utility (commadmin) をバージョン 6 2003Q4 からバージョン 6 2004Q2 にアップグレードする場合、ドメイン管理者がドメインに対するサービスの追加および削除、ドメイン属性の変更ができる。(5026945)

ドメイン管理者は、ドメイン属性を変更する権限を持つべきではありません。

このような状況は、User Management Utility (commadmin) をバージョン 6 2003Q4 からバージョン 6 2004Q2 にアップグレードする場合に発生します。commadmin のアップグレードバージョン (Access Manager 6 2004Q2 とバンドルされたもの) を新規にインストールする場合は、config-iscli プログラムを使用して commadmin を設定するときに、適切な usergroup.ldif ファイルが自動的に追加されます。

回避策

ACI を取得して、ドメイン管理者の権限を正しく制限するには、次の手順を実行します。

1. msg_svr_base/lib/config-templates ディレクトリにある usergroup.ldif を開き、テンプレート ldif の ugldapbasedn を、使用するユーザーグループのサフィックスに置き換えます。

2. 編集した usergroup.ldif を LDAP ディレクトリに追加します。

commadmin 設定プロセスがデフォルトの Web コンテナ (Application Server) を検出しない。(5015063) commadmin の設定時に、設定ユーティリティはデフォルトの Web コンテナを検出しません (Access Manager のデフォルトの Web コンテナは Application Server)。その代わりに、設定ユーティリティは Web Server インスタンスディレクトリを要求します。設定の終了時に、設定ユーティリティはユーザーに対して、war ファイルを Access Manager が使用する Web コンテナに手動で配備して、クラスパスを変更するように要求します。

回避策

commadmin を正しく設定するには、Application Server を Web コンテナとして使用して、次の手順を実行します。

1. commadmin の設定時に、Web Server インスタンスディレクトリを要求されたら、Web Server インスタンスディレクトリの代わりに Application Server インスタンスディレクトリを入力します。デフォルトでは、Application Server インスタンスディレクトリは次のディレクトリになっています。

```
/var/opt/SUNWappserver7/domains/domain1/server1
```

2. commadmin の設定を完了したあと、Application Server 設定ディレクトリの server.xml ファイルを見つけてます。デフォルトでは、server.xml ファイルは次のディレクトリにあります。

```
/var/opt/SUNWappserver7/domains/domain1/server1/config
```

server-classpath を検索し、server-classpath に次のパスを追加します。

```
app-server-root/domains/domain1/server1/applications/j2ee-modules/commcli_1/WEB-INF/classes
```

3. war ファイルを次のように配備します。

```
cd /opt/SUNWappserver7/bin
```

```
./asadmin deploy --user "admin user name" --password "admin user password"
--host hostname --port 4848 --name commcli --contextroot
commcli /opt/SUNWcomm/lib/jars/commcli-server.war
```

4. Application Server を次のように再起動します。

```
cd /var/opt/SUNWappserver7/domains/domain1/server1/bin
./stopserv ; ./startserv
```

config-wbsvr 作業の実行中に commadmin の設定に失敗する。(5011077)

まれに、commadmin の設定中 (Messaging Server のインストールおよび設定後) に config-wbsvr 作業が失敗することがあります。

回避策

commadmin の設定前に Portal Server をインストールしないでください。commadmin の設定が完了してから Portal Server をインストールしてください。

ASCII 以外のグループを変更できない。(4934768)

ASCII 以外の文字を含むグループ名でグループを作成した場合、`commadmin group modify` コマンドではそのグループを変更できません。

たとえば、`commadmin group create` コマンドで `-G` オプションを指定して ASCII 以外の文字 `XYZ` を含むグループを指定した場合、グループの LDAP エントリに `XYZ` の電子メールアドレスが自動的に追加されます。ASCII 以外の文字は電子メールアドレスに使用できないため、`commadmin group modify` によるグループの変更は失敗します。

回避策:

グループの作成時に `-E email` オプションを使用します。このオプションは、グループの電子メールアドレスを指定します。たとえば、次のように入力します。`commadmin group create -D admin -w password -d siroe.com -G XYZ -S mail ¥ -E testgroup@siroe.com`

複数の `-f` オプションを指定してグループを作成した場合に、1 つの属性のみが追加される。(4931958)

`commadmin group create` コマンドで、動的なグループの作成に複数の `-f` オプションを指定した場合、最後の `-f` オプションで指定した値のみが LDAP エントリに追加されます。その他の値は追加されません。

回避策:

`commadmin group create` コマンドを使用する際は、`-f` オプションを複数回指定しないでください。

`-M` オプションを `group modify` コマンドに渡しても、外部のメンバーをグループに追加またはグループから削除できない。(4930618 の影響)

`commadmin group modify` コマンドを `-M` オプションとともに使用して、外部のグループメンバーをグループに追加したりグループから削除したりすることはできません。

回避策:

`-A` オプションを使用して、属性名 `mgrpRFC822MailMember` とその値を `group modify` コマンドに渡します。次に例を示します。

```
./commadmin group modify -D admin -w password -G Group1 -A
+mgrpRFC822MailMember:usr100@iplanet.com
```

```
./commadmin group modify -D admin -w password -G Group1 -A
¥¥-mgrpRFC822MailMember:usr100@sun.com
```

Connector for Microsoft Outlook

ここでは、製品マニュアルに含まれず、Connector for Microsoft Outlook のリリースノートにも記載されていない最新情報を提供します。

「Shared Calendar LDAP Lookup Configuration」というヘッダーの下の、プロキシ認証のための calmaster ACI 設定方法の例は古いものです。

次の例は、ルートサフィックス (ノード) の正しい ACI を示しています。

```
dn: o=usergroup
changetype:modify
add: aci
aci: (targetattr="icscalendar || cn || givenName || sn || uid ||
mail") (targetfilter=(objectClass=icscalendaruser)) (version 3.0; acl
"Allow calendar administrators to proxy -
product=ics,class=admin,num=2,version=1"; allow (proxy) groupdn =
"ldap:///cn=Calendar Administrators,ou=Groups,o=usergroup");)
```

ドメイン basedn ノードの場合、次の例が正しい ACI を示しています。

```
dn: o=sesta.com,o=usergroup
changetype:modify
add: aci
aci: (targetattr="icscalendar || cn || givenName || sn || uid ||
mail") (targetfilter=(objectClass=icscalendaruser)) (version 3.0; acl "Allow
calendar users to read and search other users -
product=ics,class=admin,num=3,version=1"; allow (search,read) userdn =
"ldap:///uid=*, ou=People, o=sesta.com, o=usergroup");)
```

ドメインがない場合は、dn: 行の o=sesta.com を削除して、ルートサフィックス自体にこの ACI を追加します。

Calendar Server 設定プログラム csconfigurator.sh がこれらの ACI を追加します。Java Enterprise System Release 1 からアップグレードする場合は、設定プログラムを再び実行してこれらの更新された ACI を取得する必要があります。

問題の報告とフィードバックの方法

Calendar Server で問題が発生した場合は、次のいずれかの方法でご購入先のカスタマサポートに連絡してください。

- 次のアドレスにある、ご購入先のソフトウェアサポートサービス
<http://sunsolve.sun.com/pub-cgi/show.pl?target=help/collections>
このサイトには、ナレッジベース、オンラインサポートセンター、および ProductTracker へのリンクと、メンテナンスプログラムおよびサポート連絡番号へのリンクが掲載されています。
- メンテナンス契約に関連付けられている電話番号

最善の問題解決のため、サポートに連絡する際は次の情報を提供してください。

- 問題の説明。問題が発生した状況や、その問題が操作に及ぼす影響など
- マシンのタイプ、オペレーティングシステムのバージョン、および製品のバージョン。問題に影響を及ぼしている可能性のあるパッチその他のソフトウェアなど
- 問題を再現するための詳細な手順の説明
- エラーログまたはコアダンプ

問題の報告を支援するため、Sun では `capture_environment.pl` ツールを提供しています。これは、`ics.conf` ファイル、ログファイル、カレンダーデータベースファイル、プラットフォーム情報、コアファイル (使用可能な場合) など、現在の Calendar Server 環境を取り込むための Perl スクリプトです。これらのファイルは、Calendar Server の開発で問題のデバッグを行うのに役立ちます。

`capture_environment.pl` ツールを実行するには、次の手順に従います。

1. 必要に応じて、カスタマサポートから `capture_environment.pl` ツールをダウンロードします。
2. 必要に応じて、Perl をインストールしてパスに追加します。Perl をインストールできない場合は、使用する Calendar Server 環境のスナップショットを手動で作成する方法が記載されている `capture_environment.pl` ファイルの手順を参照してください。
3. `root` としてログインします (または `root` になる)。
4. `capture_environment.pl` ツールを実行します。このツールは、ファイルを `archive_directory` という名前のディレクトリにコピーします。UNIX システムでは、すべてのファイルが `tar_file` という名前の `tar` ファイルに格納されます。ただし、Windows 2000 システムでは、`archive_directory` 内のファイルを手動で Zip ファイルに追加する必要があります。
5. `tar_file` または Zip ファイルをカスタマサポートに送信します。

コメントの送付先

Sun では、常にマニュアルの向上を心がけ、ユーザーの皆様のご意見、ご提案をお待ちしております。ご意見等は、電子メールにて Sun の次の URL にお送りください。

<http://www.sun.com/hwdocs/feedback>

電子メールの「件名」にマニュアルの Part No. (819-1472) とマニュアルタイトル (Sun Java System Calendar Server 6 2005Q1 リリースノート) をご記入ください。

Sun が提供しているその他のリソース

次のインターネットアドレスには、Sun Java System に関する役立つ情報が掲載されています。

- Sun Java System Calendar Server 6 のマニュアル
http://docs.sun.com/coll/CalendarServer_04q2
- Sun Java System のマニュアル
<http://docs.sun.com/app/docs/prod/entsys.04q2?l=ja>
- Sun Java System のプロ向けサービス
<http://www.sun.com/service/sunps/sunone>
- Sun Java System のソフトウェア製品とサービス
<http://www.sun.com/software>
- Sun Java System のソフトウェアサポートサービス
<http://sunsolve.sun.com/pub-cgi/show.pl?target=help/collections>
- Sun Java System のサポートおよびナレッジベース
<http://www.sun.com/service/support/software>
- Sun のサポートおよびトレーニングサービス
<http://www.sun.com/supporttraining>
- Sun Java System のコンサルティングおよびプロ向けサービス
<http://www.sun.com/service/sunps/sunone>
- Sun Java System の開発者向け情報
<http://developers.sun.com/prodtech/index.html>
- Sun の開発者向けサポートサービス
<http://www.sun.com/developers/support>
- Sun Java System のソフトウェアトレーニング
<http://www.sun.com/software/training>

- Sun のソフトウェアデータシート
<http://www.sun.com/software>

Copyright © 2004 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.

本書で説明する製品で使用されている技術に関連した知的所有権は、Sun Microsystems, Inc. に帰属します。特に、制限を受けることなく、この知的所有権には、<http://www.sun.com/patents> の一覧に示される米国特許、および米国をはじめとする他の国々で取得された、または申請中の特許などが含まれています。

SUN PROPRIETARY/CONFIDENTIAL.

U.S. Government Rights - Commercial software. 米国政府の権利 - 商用。政府内ユーザーは、Sun Microsystems, Inc. の標準ライセンス契約、および該当する FAR の条項とその補足条項の対象となります。

ご使用はライセンス条項に従ってください。

本製品には、サードパーティが開発した技術が含まれている場合があります。

本製品の一部は、カリフォルニア大学からライセンスされている Berkeley BSD システムに基づいて開発されている場合があります。

Sun、Sun Microsystems、Sun ロゴ、Java、および Solaris は、米国およびその他の国における Sun Microsystems, Inc. の商標または登録商標です。すべての SPARC 商標は、米国 SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用されている、米国および他の国々における同社の商標または登録商標です。

Sun が提供しているその他のリソース